



古道が紡ぐ物語



壬申の乱の足跡を訪ねて④瀬田決戦

～大海人皇子、近江朝廷軍を破り勝利を収める～

天智天皇の弟・大海人皇子と、天智天皇の子・大友皇子とが皇位継承をかけて争った「壬申の乱」。前回は、大海人皇子に味方した豪族の一人、大伴吹負の飛鳥京制庄に端を発する大倭戦線を描きました。今回は、琵琶湖東岸を西進し近江朝廷軍と戦った大海人皇子軍の近江戦線と、勝利を決定づけた瀬田橋の決戦、そして乱後の大倭を描きます。

大海人皇子、近江朝廷軍を破り勝利を収める

■大海人皇子軍、近江に向けて出発

672年6月27日、大海人皇子は、自身の子である高市皇子の要請に応じ、桑名郡家を出て自ら不破に入った。このとき尾張国司が2万の兵と共に帰属し、以降大海人皇子軍の中心的兵力となったことは既に述べたとおりである。

この折、19歳の高市皇子が、ブレーンの不在を嘆いた父・大海人皇子に対し、「天皇（大海人皇子を指す）はお独りといえども、この高市が天地の神々の力を頼み、天皇のご命令のもと諸将を率いて戦えば、どうして敵は防ぐことができましょうか」と答えるシーンが『日本書紀』に描かれている。大海人皇子から軍事の全権を委譲された高市皇子は、大きな活躍を見せる。

6月29日の大伴吹負による飛鳥京制庄の2日後、7月2日に高市皇子を総指揮官として、近江・大倭・伊賀の3方面に分かれて展開した。このうち近江へは、村国男依が数万の兵を率いて出陣した。この時、敵味方を判別するために衣服に着けさせた赤い布は、劉邦（前漢の初代皇帝。秦を打倒した）を意識したとされる。

■揺らぐ近江朝廷軍の結束

一方の近江朝廷は、大海人皇子軍を迎え撃つべく征討軍を組織し、このうち不破へは山部王・蘇我果安ら率いる数万の兵が向かった。

征討軍が犬上川のほとりに至った折、事件が起きる。なんと、山部王が大海人皇子軍に投降することを恐れた蘇我果安により、山部王が殺害され

たのである。この事件は、果安も自らの首を刺して死ぬという結末を迎え、近江朝廷陣営の結束の脆さを敵味方に露呈することとなった。

征討軍の一将であった羽田矢国は、この顛末を見て近江朝廷を見限り、一族とともに大海人皇子軍に投降。大海人皇子はすぐさま矢国を将軍に任じ、近江から越前に抜ける北陸道の要衝・愛発（福井県敦賀市南部か）を封鎖し近江朝廷軍の退路を塞ぎ、この乱で動揺する北越地方の豪族を説得するよう指示を与えた。

こうした中、7日に勃発した息長横河の戦いは、男依の率いる大海人皇子軍の大勝に終わった。その後も勢いは止まらず、鳥籠山の戦い（9日）、安河の戦い（13日）、栗太の戦い（17日）で近江朝廷軍を次々に撃破していった。

■瀬田橋の決戦

7月22日、男依らは瀬田（滋賀県瀬田町）に着いた。もはや大津京までの防衛線は瀬田川のみとなった近江朝廷軍は、残った兵を橋の西に終結させていた。一方の大海人皇子軍も橋の東に大軍



瀬田の唐橋現況（滋賀県大津市瀬田）

を集結させたが、近江朝廷軍の仕掛けた罠によって進めないでいた。瀬田橋の中央を10メートルほどにわたって切断し、その上に綱を付けた1枚の長板を渡し、橋を通る者現れれば綱を引いて、下に落とそうというのである。

両軍は瀬田橋を挟んでにらみ合いを続けていたが、その決着は呆気ないものだった。大海人皇子軍の勇士が、皮鎧を重ね着して一気に橋を渡り、板につけられた綱を切ったのである。降り注ぐ矢に射られながらも敵陣に突入した勇士に兵が続き、近江朝廷軍は潰走を始める。

この瀬田橋の決戦に前後して、愛発を抑えた羽田矢国が、琵琶湖西岸に従って南下し、大津宮の北の守りを担う三尾城（滋賀県高島市）をも陥れた。こうして北への退路も断たれ、近江朝廷の首脳らはわずかな供回りの者と共に、西へ向かった。しかし同日、既に大倭を平定していた大伴吹負によって難波も制圧され、また別将らがそれぞれ上ツ道・中ツ道・下ツ道を通して、山前（京都府乙訓郡大山崎町）に集結しており、もはや逃げ場はなかった。

この様子を見て、自らの命運が尽きたことを悟った大友皇子は、立ち戻って山前（滋賀県長等山、または京都府乙訓郡大山崎町とも）に隠れ、自ら首を縊って死を選んだ。時に672年7月23日、大友皇子は24歳のことであった。



天武天皇・持統天皇陵（明日香村野口）

■天武天皇の即位（壬申の乱後の大倭）

かくして乱は終結した。8月25日に行われた戦後処理では、近江朝廷に味方した群臣らの罪状と処分が発表された。国を2つに分けた大乱にもかかわらず、死罪となったのは、左右大臣など8名に過ぎず、壬申の乱の謎を深める要因の一つとなっている。

9月8日、大倭への帰路に着いた大海人皇子は、桑名、鈴鹿等各地に宿したのち、12日に飛鳥京へと凱旋。翌673年2月27日、前年冬に造営された飛鳥浄御原宮で、大海人皇子は即位する。

「天武天皇」とは、奈良時代に追贈された漢風諡号であり、当時の呼び名とは異なる。しかし、君主の尊称として「大王」にかえて「天皇」を用い、また国号を「倭」から「日本」に定めたのは天武天皇の事績と言われる。薬師寺に代表される寺院建築など唐に影響を受けた白鳳文化は、天武天皇とその妻、鸕野讃良皇女（持統天皇）の時代に大きく花開いた。（終）（太田宜志）



壬申の乱 関係年表（近江戦線～乱終結後）	
とき	主な出来事
672年 6月27日	大海人皇子、高市皇子の要請で不破入りし、尾張国司、2万の兵を率いて帰順。高市皇子、全権の委譲を受ける
7月2日	大海人皇子軍、村国男依を指揮官として不破から出発。
このころ	近江朝廷内で内紛発生。山部王が蘇我果安に暗殺され、羽田矢国は近江朝廷を見限って大海人皇子軍に投降
7月7日	息長の横河の戦い。男依ら、近江朝廷軍を破る
7月22日	瀬田橋の決戦。大海人皇子の勝利が決定的となる
7月23日	大友皇子、山前で逃げ切れないと悟り、自害
9月12日	大海人皇子、飛鳥へと凱旋
673年 2月27日	大海人皇子、飛鳥浄御原宮にて即位